論文紹介

HTFuzz : Heap Operation Sequence Sensitive Fuzzing [ASE'22]

HTFuzz [3] の概要

ジャンル: typestate ガイドファジング

問題提起: ・UAF のような特定の順序で発生する脆弱性は

コードカバレッジだけでは効率的に発見できない

・従来の typestate ファザーは静的解析・事前情報に依存

提案手法: ・実行時にメモリアクセスを追跡し,

ヒープ操作シーケンスの多様性を高める

・実行時にアクセスされるポインタの数を計測

結果: ・従来のファザーより多くのヒープ操作シーケンスを発見

・37件の新たな脆弱性を発見(うち32件はヒープの時間的脆弱性)

目次

- 1. AFL [1] の概要
- 2. カバレッジガイドファザーの問題点
- 3. UAFL [2] の概要
- 4. HTFuzz [3] の概要



目次

- 1. AFL [1] の概要
- 2. カバレッジガイドファザーの問題点
- 3. UAFL [2] の概要
- 4. HTFuzz [3] の概要



ファジング (fuzzing)

ChatGPT に尋ねた結果:

ファジングとは、ソフトウェアやシステムの脆弱性を発見するために、ランダムまたは意図的に不正なデータや入力を生成してテストする手法です。

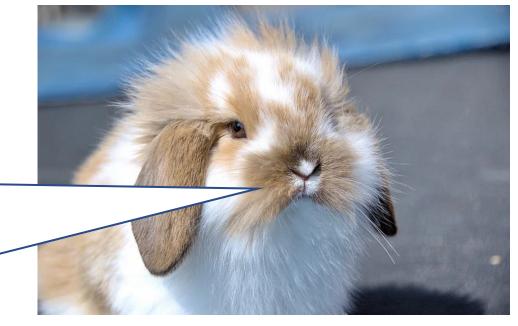
ファジング研究のゴール(の一つ):

いかに効率的に脆弱性を発見できる入力を生成できるファザーを作れるか?

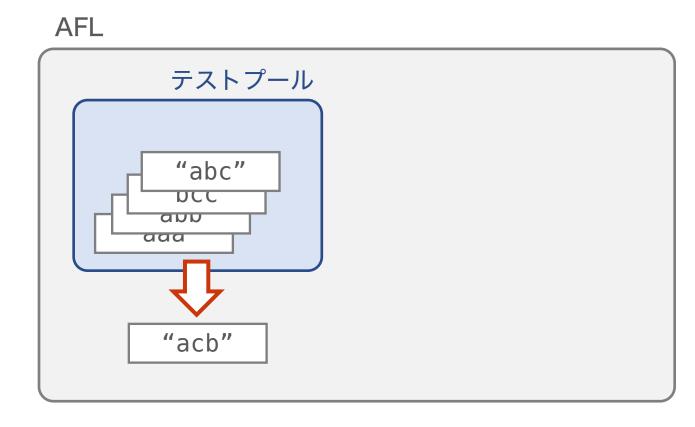
AFL (American Fuzzy Lop) [1]

- ·Google (の中の人) が開発したカバレッジガイドファザーのひとつ
- ・新しい CFG エッジを通るテストケースを興味深いものとして保存
- ・テストケースを繰り返し変異させ, 脆弱性を検出する

For many years after its release, AFL has been considered a "state of the art" fuzzer. AFL is considered "a de-facto standard for fuzzing", and the release of AFL contributed significantly to the development of fuzzing as a research area. AFL is widely used in academia; academic fuzzers are often forks of AFL, and AFL is commonly used as a baseline to evaluate new techniques. [6]

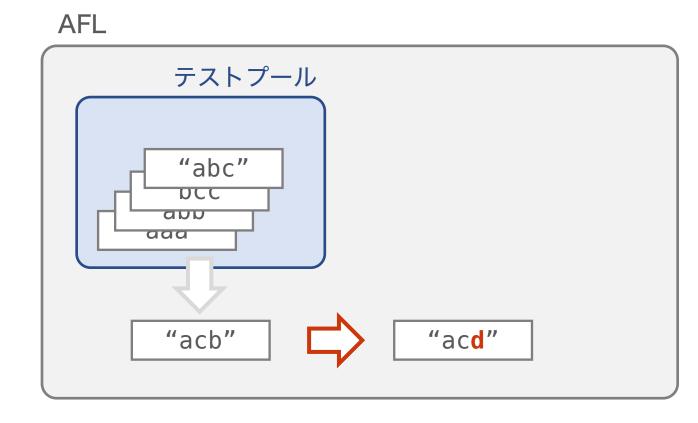


1. テストプールからシードを選択



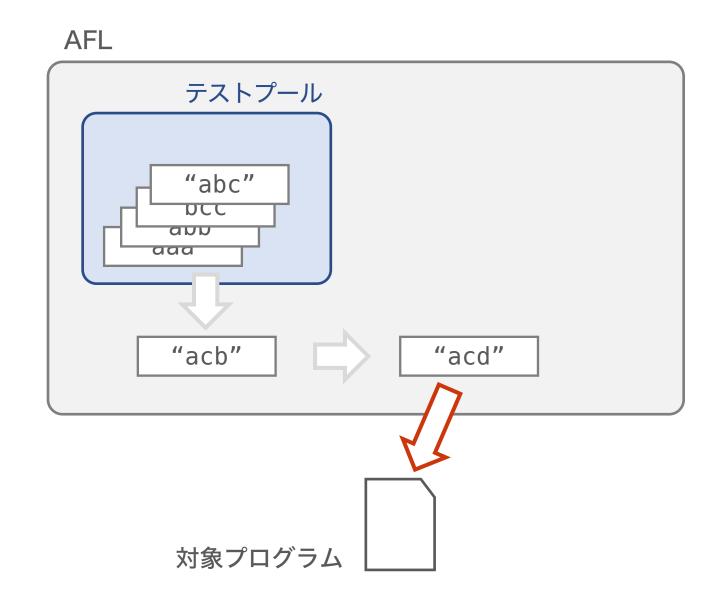
対象プログラム

- 1. テストプールからシードを選択
- 2. シードを変異

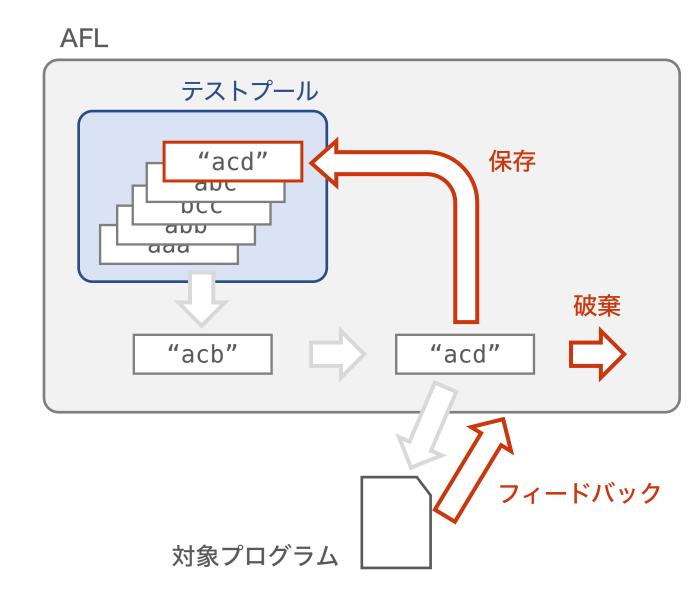




- 1. テストプールからシードを選択
- 2. シードを変異
- 3. 変異させたテストケースで 対象プログラムを実行

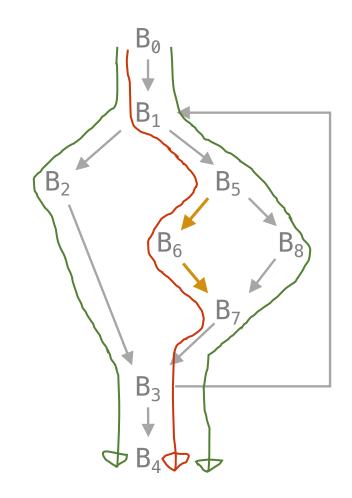


- 1. テストプールからシードを選択
- 2. シードを変異
- 3. 変異させたテストケースで 対象プログラムを実行
- 4. 実行から得られた フィードバックから, 変異させたテストケースを 残すか破棄するかを決定



AFL のフィードバック

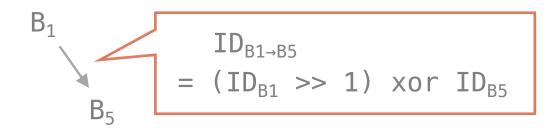
- ・CFG エッジのカバレッジを測定
 - → 網羅率の高いテストは良いテスト
- ・それまでのテストケースで通っていない CFG エッジを通ったテストケースを 興味深いものとして保存する
- より正確には、CFG エッジを新しい回数 通ったテストケースを保存する(1, 2, 3, 4-7, 8-15, 16-31, 32-127, 128- 回で分割)



→ 通ったことのない CFG エッジ

AFL のフィードバック

- ・共有メモリ shared_mem を用いて CFG エッジを通ったか測定
- ・ランダムに基本ブロックに ID を割り当て
- ・CFG エッジの ID は以下のように計算 $ID_{A\to B} = (ID_A >> 1) \text{ xor } ID_B$
 - ightarrow ID_A を右シフトするのは $ID_{A
 ightarrow B}$ と $ID_{B
 ightarrow A}$ を区別するため
- ・CFG エッジ A→B を通ったとき shared_mem[ID_{A→B}]++



- ・各実行で通過したとき $shared_mem[ID_{B1\to B5}]++$
- ・ファジングテスト全体で カバレッジを保存

 $\begin{array}{c|c} & 00001101 \\ \hline & 00101111 \\ \hline & 00000000 \\ \\ \vdots \\ \end{array}$

AFL のフィードバック

- ・ランダムに基本ブロックに ID を割り当て
- ・CFG エッジの ID は以下のように計算

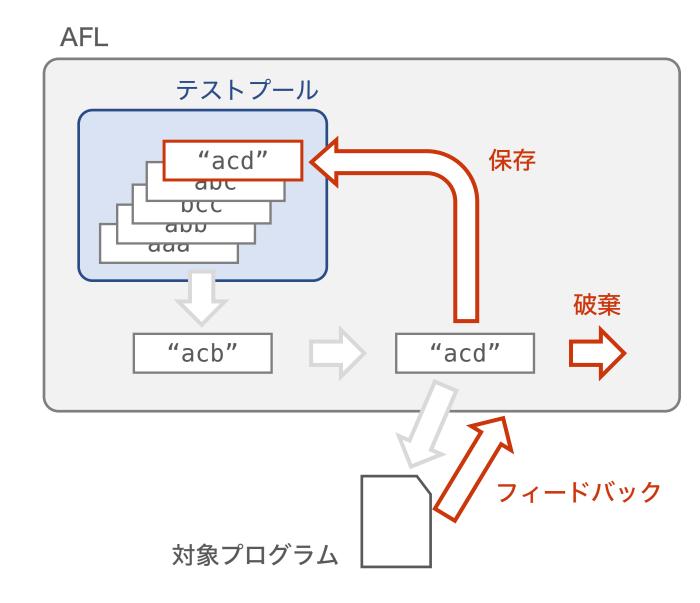
$$ID_{A\rightarrow B} = (ID_A >> 1) \text{ xor } ID_B$$

- ・ID は衝突しないのか?
 - → CFG エッジの数が多くなると 衝突する可能性は高くなる
 - → AFL は ID の衝突を無視する
- ・shared_mem[] は64KB
 - → 精度とオーバーヘッドのトレードオフ

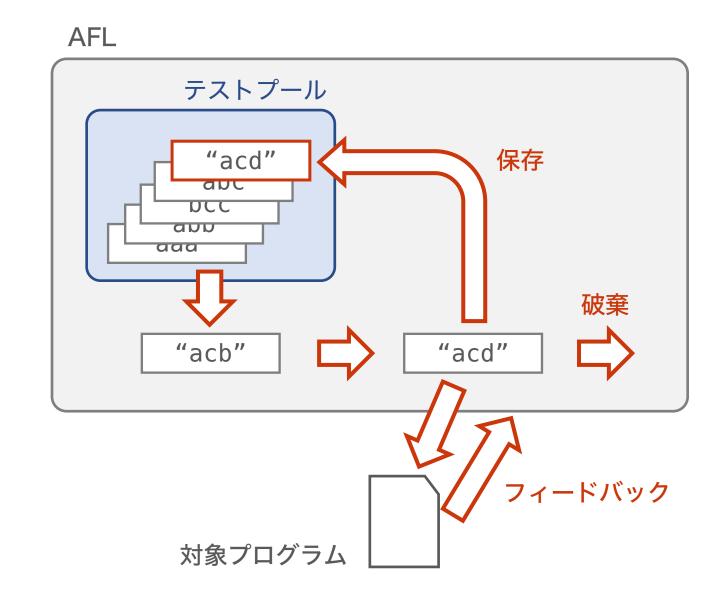
		Example targets
	+	•
1,000	0.75%	giflib, lzo
2,000	1.5%	zlib, tar, xz
5,000	3.5%	libpng, libwebp
10,000	7%	libxml
20,000	14%	sqlite
50,000	30%	-

分岐の数と ID の衝突確率 [4]

- 1. テストプールからシードを選択
- 2. シードを変異
- 3. 変異させたテストケースで 対象プログラムを実行
- 4. 実行から得られた フィードバックから, 変異させたテストケースを 残すか破棄するかを決定



- 1. テストプールからシードを選択
- 2. シードを変異
- 3. 変異させたテストケースで 対象プログラムを実行
- 4. 実行から得られた フィードバックから, 変異させたテストケースを 残すか破棄するかを決定
- 5.1~4 を繰り返す



効果的なファザーを作るには

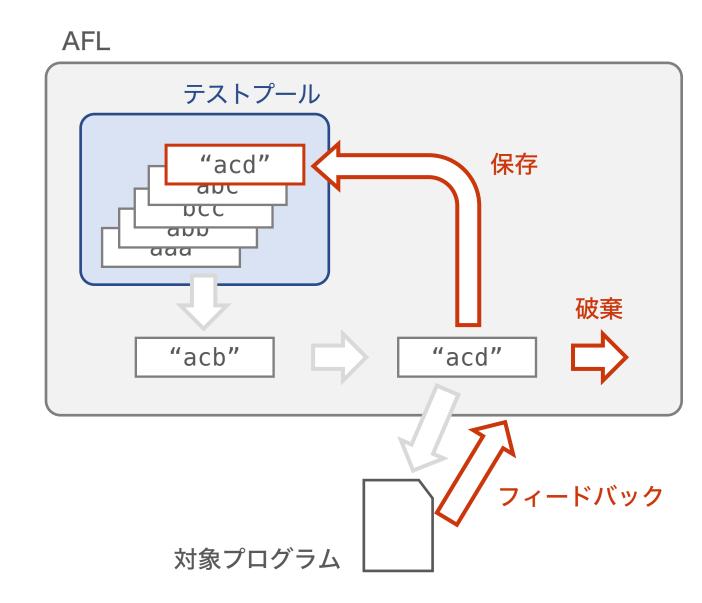
効率的に脆弱性を発見するファザーを作るために考えるべき戦略

- ・シードの 保存 戦略
- ・シードの選択戦略
- ・シードの変異戦略

(その他にも,テストケースのサイズ削減,実行の方式など, 無駄を削減する方法はある)

シードの保存戦略

- どのテストケースをテスト プールに残すか?
 - → AFL は新しい CFG エッジを 通ったテストケースを 興味深いものとして保存する



シードの選択戦略

- ・テストプール内のどのテストケースを シードとするか?
 - → AFL はファイルサイズが小さく,実行時間が早いテストケースを優先的に選択する

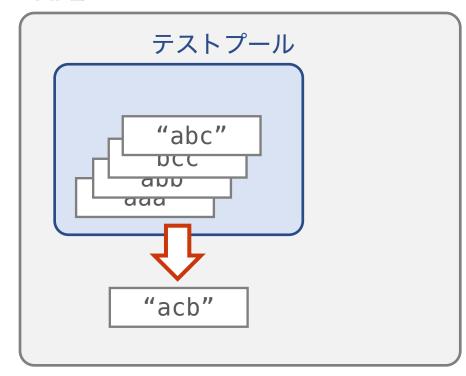


seedB

サイズ: 1MB サイズ: 2MB

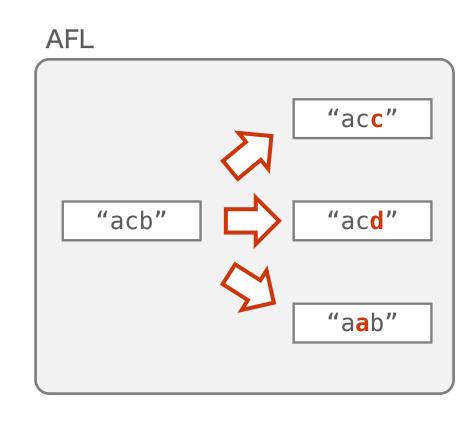
実行時間:2ms 実行時間:5ms

AFL



シードの変異戦略

- ・シードを何回変異させるか? (power scheduling)
 - → AFL はファイルサイズが小さく, 実行時間が早いシードを多く変異させる
- ・シードのどのバイトを変異させるか?
 - → AFL は各バイトを反転させて, 実行パスが 変化するかを観察
 - → 実行パスが変化したバイトのみを変異させる (effector map: 興味深いバイトを記録)



- ・シードをどのように変異させるか? (バイト反転,加減算,など)
 - → AFL はランダム

目次

- 1. AFL [1] の概要
- 2. カバレッジガイドファザーの問題点
- 3. UAFL [2] の概要
- 4. HTFuzz [3] の概要



カバレッジガイドファザーの問題点

- ・CFG エッジのカバレッジガイドファザーは単純に CFG エッジを 通ったかどうかだけを記録する
- ・特定の順序で通ったかどうかは気にしない
 - 例) $A \rightarrow B$, $B \rightarrow C$ を通ったことは分かっても $A \rightarrow B \rightarrow C$ を通ったかどうかは分からない
- ・脆弱性には、一連の操作を特定の順序で行う必要があるものも 例) Use After Free (UAF) : malloc → free → use
 - → CFG エッジカバレッジガイドファザーはこのような脆弱性を 効率的に発見できない!

UAF の例

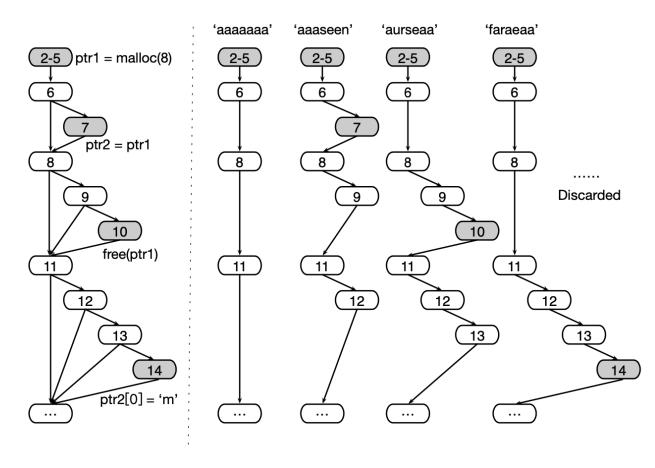
・4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14 の順で通ったとき UAF が発生する

buf = "furseen" など

```
1 void main() {
     char buf[7];
     read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8);
     char *ptr2 = malloc(8);
     if (buf[5] == 'e')
       ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
       if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
11
12
       if (buf[2] == 'r')
13
          if (buf[0] == 'f')
           ptr2[0] = 'm';
14
15
16 }
```

AFL の例

- ・シードに対しての変異が6→7,9→10,13→14のエッジを通る
- ・すべての CFG エッジを通ったため AFL はそれ以降の変異をすべて 破棄する
- \rightarrow 例えば、これ以降に $4 \rightarrow 7 \rightarrow 10$ を 通るテストケースが生成されても、 UAF の発見に近づくかもしれないが 破棄される
- ・4 → 7 → 10 → 14 を通るテストケースを生成するのは困難



(a) Control flow graph

(b) Fuzzing process in AFL

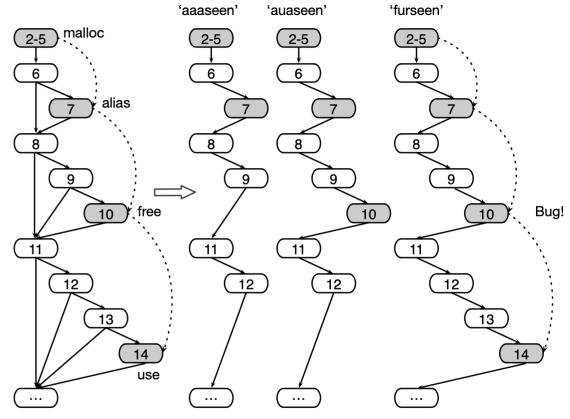
目次

- 1. AFL [1] の概要
- 2. カバレッジガイドファザーの問題点
- 3. UAFL [2] の概要
- 4. HTFuzz [3] の概要



typestate ガイドファジング

- ・UAF は 4 → 7 → 10 → 14 で発生する
- ・AFL で破棄された 4 → 7 → 10 を通る テストケースは UAF の発見に近づく ため残したい
- ・4 → 7 → 10 → 14 を通るテストケースを生成できるようにフィードバックを改良する



Phase1: Typestate Analysis

Phase2: Typestate-Guided Fuzzing

(c) Fuzzing process in UAFL

UAFL [2]

・一連の操作を特定の順序で実行したときに発生する脆弱性の検出を 目的としたファザー

例) Use After Free (UAF) : malloc \rightarrow free \rightarrow use

UAFL の2つのステップ

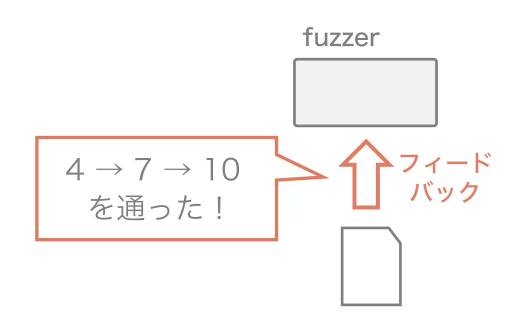
1. 静的 typestate 解析

UAF であれば、 $malloc \rightarrow free \rightarrow use$ となる操作シーケンス (命令列) を静的に求める

2. typestate ガイドファジング

1で求めた操作シーケンスを実行する テストケースを生成できるように AFL を改良する

$$4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14$$



・typestate プロパティに違反する可能性のある 操作シーケンスを静的に求める

```
例) Use After Free (UAF):

malloc → free → use となる
操作シーケンスを静的に求める
```

・右の例で 4 → 7 → 10 → 14 を求めたい

```
1 void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
      char *ptr1 = malloc(8);
      char *ptr2 = malloc(8);
      if (buf[5] == 'e')
        ptr2 = ptr1;
      if (buf[3] == 's')
 9
        if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
      if (buf[4] == 'e')
11
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
            ptr2[0] = 'm';
14
15
16 }
```

UAF のアルゴリズム

- ・すべての malloc に対して
 - ・エイリアス解析からそのメモリを 指すすべてのポインタを求め、
 - ・そのポインタを使って free, use する命令を求め,
 - ・malloc → free → use が
 到達可能ならその命令列を
 UAF を引き起こす可能性のある
 操作シーケンスとして報告

Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free

```
input : A program P

output: A set of operation sequences S

1 S \leftarrow \emptyset;

2 (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);

3 foreach (s_m, m) \in (S_M, M) do

4 A \leftarrow cal\_alias(m);

5 S_F \leftarrow find\_free(A, P);

6 S_U \leftarrow find\_use(A, P);

7 S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_U \land is\_reachable(s_f, s_u)\};

8 return S;
```

```
(アルゴリズム2行目)
                            malloc は 4行目と5行目
                                  Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free
                                               input : A program P
                                               output: A set of operation sequences S
                             1 S \leftarrow \emptyset;
                              (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);
                              _3 foreach (s_m, m) ∈ (S_M, M) do
                                                                             A \leftarrow cal\_alias(m);
                                                                    S_F \leftarrow find\_free(A, P);
                                                                  S_U \leftarrow find\_use(A, P);
                                                                   S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_F \land
                                                                                          S_U \wedge is\_reachable(s_m, s_f) \wedge is\_reachable(s_f, s_u);
```

8 return S;

```
void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8); // 01
     char *ptr2 = malloc(8); // 02
     if (buf[5] == 'e')
        ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
 9
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
14
            ptr2[0] = 'm';
15
16
```

(01 についてアルゴリズム4行目)

```
エイリアス解析から
01 を指すポインタは ptr1, ptr2
                Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free
                           input : A program P
                            output: A set of operation sequences S
           1 S \leftarrow \emptyset;
            (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);
            3 foreach (s_m, m) \in (S_M, M) do
                                                         A \leftarrow cal\_alias(m);
                                                   S_F \leftarrow find\_free(A, P);
                                                S_U \leftarrow find\_use(A, P);
                                                S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_f \land
                                                                    S_U \wedge is\_reachable(s_m, s_f) \wedge is\_reachable(s_f, s_u);
            8 return S;
```

```
1 void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8); // 01
     char *ptr2 = malloc(8); // 02
     if (buf[5] == 'e')
        ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
 9
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
11
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
14
            ptr2[0] = 'm';
15
16
```

```
(01 についてアルゴリズム5行目)
ptr1, ptr2 を使った free 文は
10行目
```

```
Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free input : A program P output: A set of operation sequences S

1 S \leftarrow \emptyset;

2 (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);

3 foreach (s_m, m) \in (S_M, M) do

4 A \leftarrow cal\_alias(m);

5 S_F \leftarrow find\_free(A, P);

6 S_U \leftarrow find\_use(A, P);

7 S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_U \land is\_reachable(s_f, s_u)\};
```

8 return S;

```
void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8); // 01
     char *ptr2 = malloc(8); // 02
     if (buf[5] == 'e')
       ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
 9
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
14
            ptr2[0] = 'm';
15
16
```

```
(01 についてアルゴリズム6行目)
ptr1, ptr2 を使った use 文は
14行目
```

Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free

```
input : A program P

output: A set of operation sequences S

1 S \leftarrow \emptyset;

2 (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);

3 foreach (s_m, m) \in (S_M, M) do

4 A \leftarrow cal\_alias(m);

5 S_F \leftarrow find\_free(A, P);

6 S_U \leftarrow find\_use(A, P);

7 S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_U \land is\_reachable(s_m, s_f) \land is\_reachable(s_f, s_u)\};

8 return S;
```

```
void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8); // 01
     char *ptr2 = malloc(8); // 02
     if (buf[5] == 'e')
       ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
 9
        if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
14
            ptr2[0] = 'm';
15
16
```

```
(01 についてアルゴリズム7行目)
 s_m = 4, s_f = 10, s_{II} = 14
  s_m \rightarrow s_f \rightarrow s_{II} は到達可能
   Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free
     input : A program P
     output: A set of operation sequences S
   1 S \leftarrow \emptyset;
   (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);
   _3 foreach (s_m, m) ∈ (S_M, M) do
        A \leftarrow cal\_alias(m);
```



8 return S;

```
char *ptr2 = malloc(8); // 02
                                                                    if (buf[5] == 'e')
                                                                       ptr2 = ptr1;
                                                                    if (buf[3] == 's')
                                                             9
                                                                       if (buf[1] == 'u')
                                                                          free(ptr1);
                                                           10
                                                                    if (buf[4] == 'e')
                                                           11
                                                           12
                                                                       if (buf[2] == 'r')
S_F \leftarrow find\_free(A, P);
                                                                          if (buf[0] == 'f')
                                                           13
S_U \leftarrow find\_use(A, P);
S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in
                                                           14
                                                                             ptr2[0] = 'm';
  S_U \wedge is\_reachable(s_m, s_f) \wedge is\_reachable(s_f, s_u)\};
                                                           15
                                                           16
```

1 void main() {

char buf[7];

read(0, buf, 7);

char *ptr1 = malloc(8); // 01

```
4 \rightarrow 10 \rightarrow 14 (エイリアス文も含めた 4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14) の操作シーケンスは UAF を引き起こす可能性がある
```

Algorithm 1: Typestate Analysis for Use-After-Free

```
input : A program P output: A set of operation sequences S

1 S \leftarrow \emptyset;

2 (S_M, M) \leftarrow find\_malloc(P);

3 foreach (s_m, m) \in (S_M, M) do

4 A \leftarrow cal\_alias(m);

5 S_F \leftarrow find\_free(A, P);

6 S_U \leftarrow find\_use(A, P);

7 S \leftarrow S \cup \{\langle s_m, s_f, s_u \rangle | s_f \in S_F \land s_u \in S_U \land is\_reachable(s_m, s_f) \land is\_reachable(s_f, s_u)\};

8 return S;
```

```
1 void main() {
     char buf[7];
      read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8); // 01
     char *ptr2 = malloc(8); // 02
     if (buf[5] == 'e')
        ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
 9
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
11
12
        if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
14
            ptr2[0] = 'm';
15
16
```

到達可能性

・ここでの到達可能性の判定は path-insensitive に行う path-insensitive: パスの条件を無視した解析 (↔ path-sensitive)

Q. B から F は到達可能?(B, D で x の値は変わらないとする)

path-sensitive:

path-insensitive:

UAFL:静的 typestate 解析

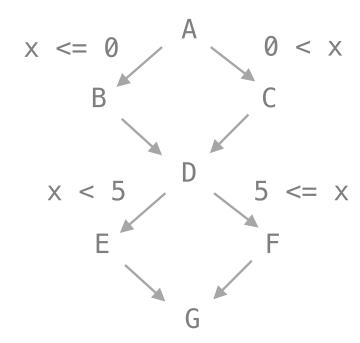
到達可能性

・ここでの到達可能性の判定は path-insensitive に行う path-insensitive: パスの条件を無視した解析 (↔ path-sensitive)

Q. B から F は到達可能?(B, D で x の値は変わらないとする)

path-sensitive: 到達不可能

path-insensitive: 到達可能



UAFL:静的 typestate 解析

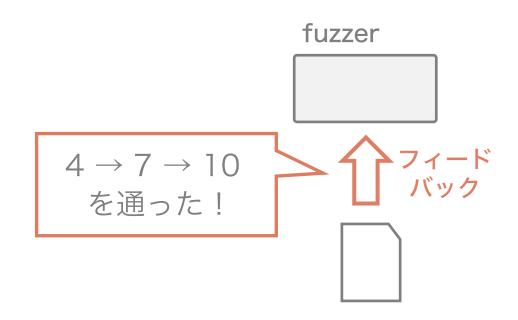
到達可能性

- ・ここでの到達可能性の判定は path-insensitive に行う path-insensitive:パスの条件を無視した解析 (↔ path-sensitive)
- ・静的 typestate 解析で求められた操作シーケンスは 実行不可能なものも多い (false-positive が多い)
- ・本当にこの操作シーケンスが実行可能かどうかはファジングで調べる
 - → (無駄な操作シーケンスのガイドにファジングの多くの時間を費やす?)

UAFL: typestate ガイドファジング

・静的 typestate 解析で特定した操作シーケンスを実行する 入力を生成できるファザーを作りたい

操作シーケンス: $4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14$



- \cdot 4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14 という 操作シーケンスが与えられたとき
 - $4 \rightarrow 7$
 - \cdot 4 \rightarrow 7 \rightarrow 10
 - \cdot 4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14

と順番にテストケースを 保存できるようにし,

最終的に操作シーケンスを

満たすようにフィードバックを設計する

fuzzer テストプール "acd" 保存 auc DCC avv aaa 破棄 "acd" "acb" 対象プログラム

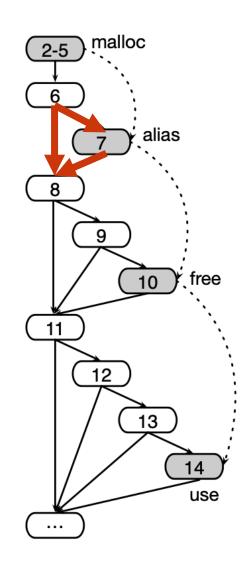
- ・操作シーケンス: 4 → 7 → 10 → 14
- ・直感的には、10行目を通ったときに 7行目を通ったかどうかを知りたい
- ・一回のプログラムの実行で以下の情報を記録

OP_mem[]:操作シーケンス内の基本ブロックを

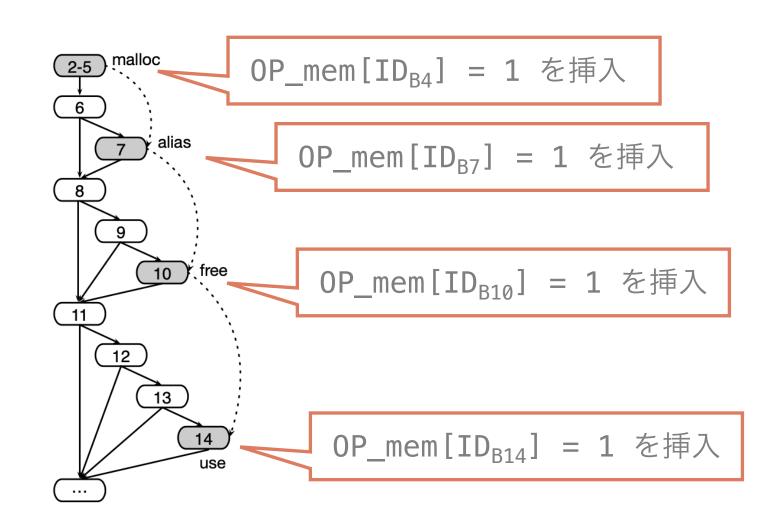
通ったか記録

OPE_mem[]:操作シーケンスエッジをカバーしたか

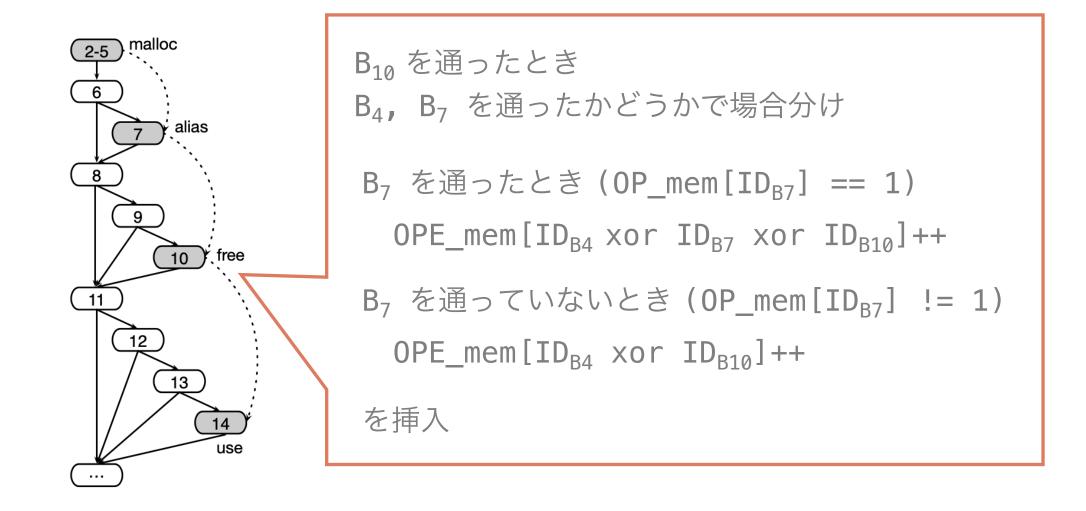
記録



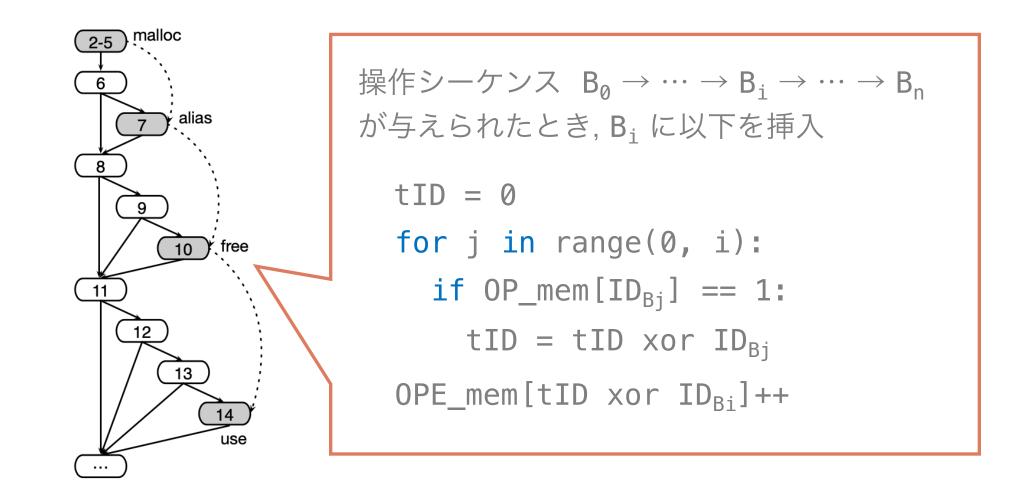
OP_mem[]:操作シーケンス内の基本ブロックを通ったか記録



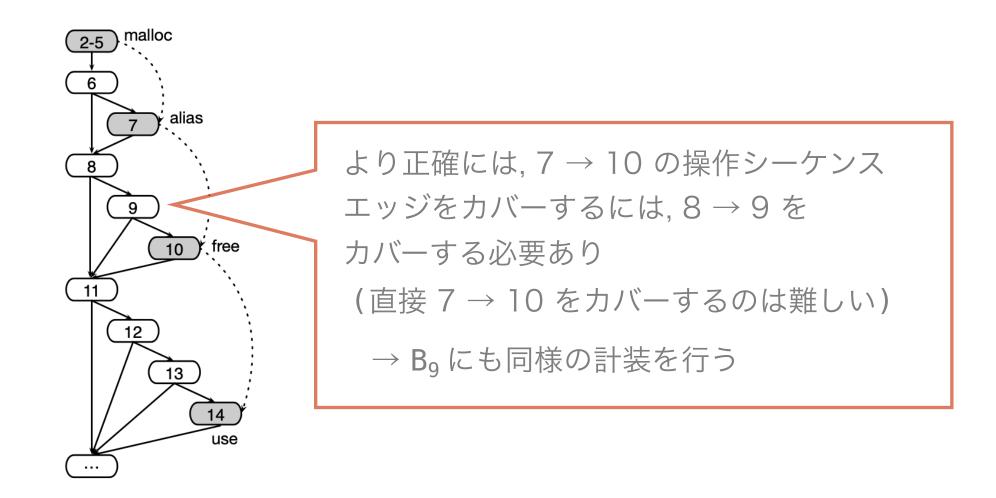
OPE_mem[]:操作シーケンスエッジをカバーしたか記録



OPE_mem[]:操作シーケンスエッジをカバーしたか記録



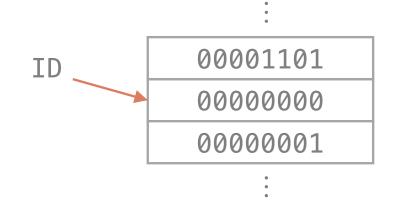
OPE_mem[]:操作シーケンスエッジをカバーしたか記録



OPE_mem[]:操作シーケンスエッジをカバーしたか記録

OPE_mem[ID] >= 1 :

ファジングテスト全体のカバレッジ

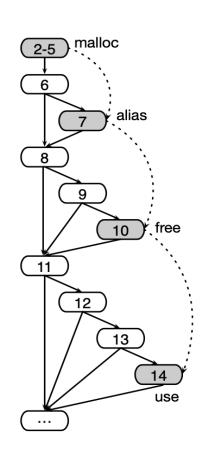




新しいエッジを通過した 興味深いテストケース なので保存!

UAFL:シードの選択戦略

新しい操作シーケンスエッジをカバーした テストケースを優先的に選択



操作シーケンス: $4 \rightarrow 7 \rightarrow 10 \rightarrow 14$

新しく

$$\cdot$$
 4 \rightarrow 7 \rightarrow 9

$$\cdot$$
 4 \rightarrow 7 \rightarrow 10

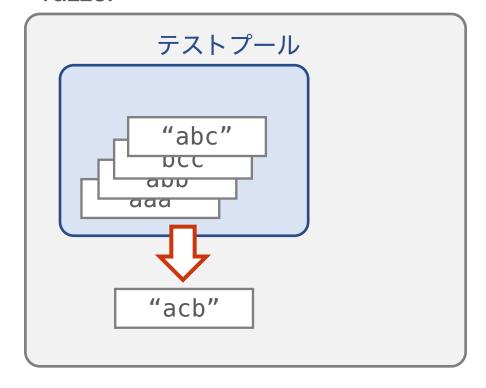
をカバーしたテストケースは保存



$$4 \rightarrow 7 \rightarrow 10$$

のテストケースを優先

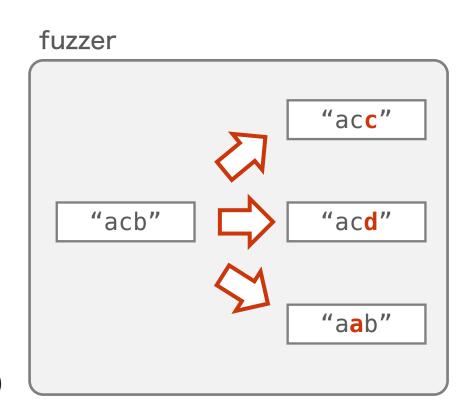
fuzzer



・シードを何回変異させるか? (power scheduling) より多くの操作シーケンスエッジをカバーする テストケースに多くの変異機会を割り当て

$$UAFL_energy(i) = AFL_energy(i) * \left(1 + rac{c_OSe}{t_OSe}
ight)$$

- 。 $UAFL_energy(i)$: シードiの変異回数に比例
- 。 $AFL_energy(i)$: AFL のエネルギー (入力ファイルの小ささや実行時間に影響)
- 。 t_OSe : 操作シーケンスエッジの総数
- 。 c_OSe : シードiによってカバーされる操作シーケンスの総数



・シードのどのバイトを変異させるか?

 $7 \rightarrow 10$ をカバーするには buf[3], buf[1] に変異を集中させるべき

情報フロー (information flow) 解析 [5] を用いて入力の各バイトが $7 \rightarrow 10$ の間の条件

```
8 if (buf[3] == 's')
```

9 if (buf[1] == 'u')

にどれだけ影響を与えるか計算

```
void main() {
     char buf[7];
     read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8);
     char *ptr2 = malloc(8);
      if (buf[5] == 'e')
       ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
11
12
       if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
            ptr2[0] = 'm';
14
15
16
```

- ・シードのどのバイトを変異させるか?
 - ・入力の各バイトを変異させつつ、入力バイトと 条件式の変数間の情報フロー強度 (information flow strength)を計算
 - → 情報フロー強度が高いバイトほど 高い変異確率を割り当てる

```
void main() {
     char buf[7];
     read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8);
     char *ptr2 = malloc(8);
     if (buf[5] == 'e')
       ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
       if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
11
     if (buf[4] == 'e')
12
       if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
            ptr2[0] = 'm';
14
15
16
```

・シードのどのバイトを変異させるか?

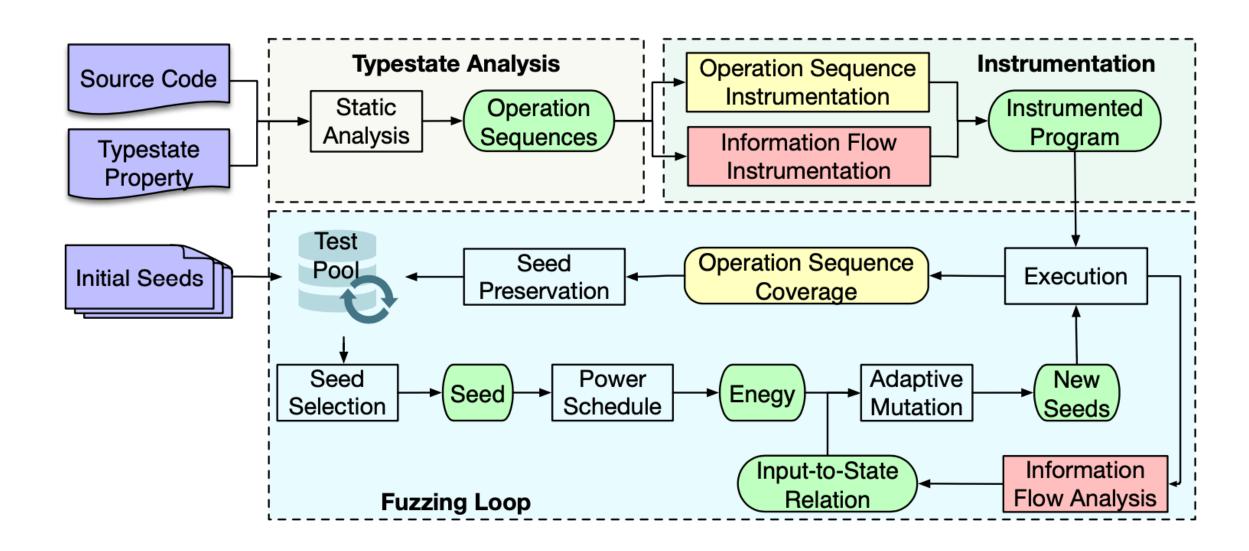
例:入力の3,6バイト目(0始まり)と 8行目の条件式の変数 buf[3] を考える

各バイトを 10回ずつ変異させると 情報フロー強度は

- ・3バイト目:3.3
- ・6バイト目:0
- → 3バイト目に高い変異確率を割り当てる

```
void main() {
     char buf[7];
     read(0, buf, 7);
     char *ptr1 = malloc(8);
     char *ptr2 = malloc(8);
     if (buf[5] == 'e')
        ptr2 = ptr1;
     if (buf[3] == 's')
        if (buf[1] == 'u')
          free(ptr1);
10
     if (buf[4] == 'e')
11
12
       if (buf[2] == 'r')
          if (buf[0] == 'f')
13
            ptr2[0] = 'm';
14
15
16
```

UAFL のまとめ



目次

- 1. AFL [1] の概要
- 2. カバレッジガイドファザーの問題点
- 3. UAFL [2] の概要
- 4. HTFuzz [3] の概要

